

---

# 天使

みるく

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使

### 【Nコード】

N3988Z

### 【作者名】

みるく

### 【あらすじ】

私は天使に出会いました

## ブローグ

桜がまう中、私たちは出会ったんだ。

ピンクの花びらが私のまわりを舞う。

この花びらたちは土に戻って、私たちを生かすための栄養をつくる。

そしてまた、私たちに桜を見せてくれるんだ。

この綺麗な桜は夢だったとは思えない。

けど・・・あなたは夢なのかな・・・？

現実を見る私は桜の花びらを見ないといけない。

現実じゃないあなたを見てはいけない・・・。

私は花びらなんてどうでもよかった・・・。

ただ、あなたを見れたらよかったんだ・・・。

## 第1章 サクラ

「ゆ、有紀さ・・スカート短くない？」

私は有紀のスカートをちらりと見た。ひざ上7センチほどのスカート。おっている様子はないのでおそらく縫っているかきつたのである。

「えー!!日和のスカートが長すぎなんだよ。」

有紀は自分のスカートをぱんとたたいた。私のスカートはひざ下5センチほど。入学式なので普通のはずだ。今年から私たちは中学生になる、初めての制服で少しテンションが高いのかもしれない。だけど、中学校では先輩が先生より怖いと聞いた。なるべく目立たないようにしなければならぬ。

「彼氏できるかな??」

有紀は鏡で自分の髪の毛をチェックしている。有紀は昔から大人びていた、小2の頃からもうすでに鏡を持ち歩いてたほどだし。私とはいうと鏡なんて持っていない。かばんの中には筆記用具が入っているだけだ。軽いかばん、だけど1週間もすれば重くなるだろう。これからこのかばんの中にはたくさんの教科書が入ってくると思うとゾッとした。私たちは中学校に入った。

「クラスは一緒かな??」

有紀は張り出されていたクラス表を見ている。そのとき、冷たい風がふいた。女子はスカートを抑えて必死に風に対抗をした。男子はというとはしゃぎまわっている。

「あー!!違うクラスだし!!私は3組で日和は1組・・。」

「残念だね・・。」

私たちはそれぞれの教室に向かった。1年の教室は4階にあるので階段がきつい。踊り場にある掲示板には美術部の絵が張り出されていた。数人の少女達が楽しそうに見ている。

「キャ!!!」

私は階段でつまずいてこけてしまった。足がひりひりする。

「大丈夫？」

上から声がした。私は上を向くと少年が立っていた。黒髪でカッコいい少年だ。

「だ、大丈夫！！ありがとう。」

私は急いで立った。こんな恥ずかしいところを見られた！！

## 第2章 花びら

「あ・・・えつと・・・。」

私は頬を赤くした。恥ずかしい！！もしかしたらこの人はこの後、友達とかにこのことを言うかもしれない・・・。私の脳内に少年が悪い顔をしているんな人に言っている映像が映し出された。怖い！

「足でも痛いのか？」

少年は優しい声で聞いてきた。

「だ、大丈夫！！！！！！！」

「そっか。」

少年はそのまま上へと上がっていった。私は手すりに全体重をかけてため息をついた。優しそうな人でよかった。あの人ならいわずさそう！！私はほっとした。とりあえず自分の教室へと急ぐ。教室に入るといったぱいの人々が席に座っていた、先ほどの少年はいない。いろんな子がいる。不良な子やまじめそうな子、見た目だけでは判断できない子など。

「12番はと・・・。」

私は自分の席を探し始めたがすぐに見つかった。前から2番目の席だ。

「こんにちわ！！どこの小学校から来たの??????」

前に座っていた女の子が私に話しかけてきた。

「御簾紀小学校からです。」

「おー！！私は大磯小だよ！！よろしく・・・って、名前を言わないとね、金子リクです。」

リクは1人でべらべらと話を進めた。私は啞然としてしまった。

「私の名前は釜月日和です。よろしくね。」

「よろしく！！！」

この子がはじめての中学校での友達だった。

「あ、あのさ!」

私はリクにさっきの少年の話をした。知っていたら嬉しいんだけどね。

「あー!!それは東原燐だよ。」

「東原・・・?」

よかった、知ってるよ。

「私とは違う小学校だったけどすごいかわいって噂になった。クラスの女の子全員から告白されたって言う噂を聞いたことがあるけど、けっこう性格悪いらしいよ。」

「え!」

驚きだった、かわいいいのは認めるけど性格悪いの??じゃあ・・さっきの言いふらされてたりしないよね??私は不安になった。

「東原がどうしたの?」

「な、なんでもない。」

なんでもないのに聞いてきた私をリクは不思議そうに見た。まさか性格が悪いとは。

「・・・何組か知ってる??」

「なんかあったの?」

「・・・べ、別に・・・。」

「ふーん、確か3組。」

「へー。」

後で3組に行ってみよう、もう1回あってみたいし。

### 第3章 恋花

「あの人だよ。」

リクは窓際に座っている少年を指差した。確かに東原だ、外を眺めている。窓の外には大きな桜の木の先っぽが見えている、先っぽだけど綺麗だ。その周りでは女の子たちが話しかけようと必死にチャンスをうかがっていた。

「どうするの??話しかけるの?」

リクは私に聞いてきた。私は今、話しかけるのは失礼な気がしたが今すぐ話しかけたくなってきた。

「う、うん!!」

「機嫌損ねないようにね。」

「りょーかい!!」

私はゆっくりと東原に近づいていった、何を話そうかその間に考えながら……。話の内容はこれしかない!!私はそう思った。

「と、東原??」

私は恐る恐る名前を呼んだ。機嫌を損ねないように……。

「ん?」

東原は返事をしたがこっちを向きそうにない。おそらく私が誰か分かっているかと思う。私は数秒黙った、何か返事があると思って、だけどもったく返事をしないのもう1回話しかけることにした。うう……女子からの視線がいたい。

「桜……好きなの??」

「……好き……」

東原はか細い声で答えた。そっか、桜がすきなのか。

「私も桜が好きだよ!!綺麗だよね。」

「……うん……」

あれ??何故かテンションが低いのは気のせいですね?私はこれ



以上はなしかけるのは無理だと判断してリクのところに戻るうとしたとき

「!!!??」

東原の目から1粒の涙が落ちた。綺麗で透明な涙……。私は何か分からなくなった。東原はすぐに涙をふいてこっちを向いた。うわー、やっぱりかっこいいや。まつげ長いし。

「……どういうつもり？」

「はい??」

東原は機嫌が悪そうに私を見た、冷たい目だ。

「あ……。その、さっき私がこけたときに……。その……。」

「あー……。俺なんかへんなこと言った??」

「いや、全然!!!」

相変わらず笑ってはくれなかったけど機嫌は直ってきた。やっぱり優しい目をしている。

「ありがとう……。」

私は照れくさかったがそう言って逃げた。東原がどう思ったかは分からないけど、私は何故か問う腹のことが愛おしく思えた。……恋……。なのかな??

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3988z/>

---

天使

2011年12月16日17時54分発行